九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

音声コミュニケーション障害を有する患者のヘルスリテラシーに対する薬剤師の役割に関する研究 : 先天性聴覚障害者と喉頭摘出者を対象として

俵口, 奈穂美

https://hdl.handle.net/2324/1785382

出版情報：九州大学, 2016, 博士（臨床薬学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

音声コミュニケーション障害を有する患者のヘルスリテラシーに対する薬剤師の役割に関する研究
－先天性聴覚障害者と喉頭摘出者を対象として－

臨床育薬学分野　　俵口　奈穂美

【序論】

今日、自分の健康を主体的に管理し、健康や医療に関する意思決定に積極的に関わることが求められている。そのため、個人が健康問題に対して適切に判断を行うために必要な基本的な健康情報やサービスを獲得、処理、理解する能力であるヘルスリテラシーが注目されている。医療者は患者のヘルスリテラシーを評価することによって、そのリテラシーに合わせた効率的な情報提供を行うことが可能になる。そして、患者のヘルスリテラシーに応じた健康や疾病に関する情報を分かりやすく提供することが必要である。ヘルスリテラシーに影響を及ぼす要因の一つとして、聴覚障害や喉頭摘出による音声コミュニケーション障害がある。音声コミュニケーション障害は患者が健康に関する情報を獲得することの妨げとなり、情報が不足する。音声コミュニケーション障害を有する先天性聴覚障害者、喉頭摘出者の薬の使い方に関する知識や安心感を把握し、リテラシーに応じた疾病や薬に関する情報を提供することは、ヘルスリテラシーの向上、有効な薬物療法にとって重要である。

第１章では、高齢の先天性聴覚障害者の薬の使い方に関する知識を難聴者、健聴者と比較した。また、先天性聴覚障害者の薬の使い方に関する知識の向上を目的とし、先天性聴覚障害者の読み書きのリテラシーに応じた講義を行い、その効果を検証した。さらに薬の知識に及ぼす年齢の要因を把握するために、先天性聴覚障害者の高齢者と高校生との比較を行った。

第２章では、発声訓練のための患者会に参加している喉頭摘出者を対象として、術後症状、服用状況、医療者とのコミュニケーションについての現状を把握した。その結果をもとに便秘、不眠、痰が絡む、永久気管孔周囲の皮膚乾燥の 4 症状について、術後症状、生活上の注意点、薬についての理解度、安心感について調査した。術後症状の原因、症状緩和に使用される薬に加え、生活上の注意点に関する薬剤師による講義を開催し、その効果を評価した。

【方法】

第１章先天性聴覚障害者の薬の使い方に関する知識と安心感について

先天性聴覚障害者 20 名、難聴者 19 名、健聴者 20 名、高校生 22 名を対象とした。先天性聴覚障害者、難聴者、健聴者を対象として、薬の使い方に関する知識について、先天性聴覚障害者と難聴者を対象として、薬の使用に関する意識について質問紙による調査を行った。先天性聴覚障害者と難聴者はこの２種類の質問紙調査を行った直後、先天性聴覚障害者の読み書きのリテラシーに応じた、知識調査の質問内容を解説するお薬教室を２時間行った。一方、健聴者には知識に関する調査を１回のみ行い、教室は実施しなかった。教室実施３から６か月後に、先天性聴覚障害者および難聴者に薬の使い方についての知識および、薬の使用に関する意識について質問紙による調査を再び行い、薬の使い方の知識の記憶ならびに薬の使用に関する意識の評価を行った。

薬の使い方に関する知識調査では、20 項目の設問について、正しい、間違っている、のいずれかを選び、正解を 1 点とし 20 点満点で評価した。薬の使用に関する意識調査では、薬剤師による説明の理解度、薬を正しく使うことに対する自信、薬の使用に対する安心感の 3 項目について 4 段階評価にて回答を得て、1 または 2 との回答を「はい」、3 または 4 との回答を「いいえ」として解析を行った。

さらに、薬の知識に及ぼす年齢の要因を把握するために、薬の使い方に関する知識調査を高校生に同様に実施し、先天性聴覚障害者の高齢者との比較を行った。

第 2 章　喉頭摘出者の術後症状と医療者のコミュニケーションについて

発声練習のための患者会である創声会と発声会に参加した喉頭摘出者を対象とした。術後症状についての現状把握と薬に関する講義内容を検討するため、創声会 20 名を対象に性別、年齢、喉頭摘出術後年数、服用薬、喉頭摘出後の症状 10 項目、現在の気持ち 3 項目、医療者とのコミュニケーション 4 項目についてアンケート調査を行った。事前調査の術後症状の中で頻度が高く、薬によって対処可能な便秘、不眠、痰が絡む、気管孔周囲の皮膚乾燥の 4 症状を講義の対象とした。術後症状に関する理解度、安心感をどのように感じているかを把握し、さらに教室によってこれらが向上するか検討するため、アンケート調査を教室直前と 1 か月後の 2 回実施した。各症状の理解度として、症状の要因、生活上の注意点、薬の 3 項目、各症状の安心感として、生活上の注意、薬についての安心感、症状がでた時の不安感の 3 項目について 4 点満点で評価し、理解度 3 項目と安心感 3 項目の合計点（12 点満点）をそれぞれの総合評価とした。教室前の理解度、安心感に影響する因子を知るために、対象者を服用薬の有無、術後症状の数（0～2 種類と 3～4 種類）、喉頭摘出後の年数（5 年未満と 5 年以上）に分け、それぞれの 2 群間で理解度、安心感の総合評価の中央値を比較した。

【結果】

第 1 章　先天性聴覚障害者の薬の使い方に関する知識と安心感について

教室前の先天性聴覚障害者の得点は、8.5(1-18)で、難聴者の得点の 16(11-19)に比べ有意に低く、健聴者の得点 16.5(15-20)に比べても有意に低かった。一方、難聴者と健聴者の得点には有意差がなかった。教室後、先天性聴覚障害者と難聴者の得点は、それぞれ 16(3-20)、19(12-20)と有意に上昇した。しかし、先天性聴覚障害者の得点は、教室後においても難聴者に比べ有意に低かった。また、先天性聴覚障害者のお薬の使い方の得点は、ばらつきが大きかった(Fig. 1)。高校生の得点は 15.5(10-19) で、高齢者の得点 8.5(1-18) に比べ有意に高かった。また、高齢者の得点はばらつきがあったが、高校生 22 名すべての得点は 10 点以上であり、高齢者に比べばらつきが少なかった (Fig. 2)。

教室前後における先天性聴覚障害者および難聴者の薬の使用に関する意識調査では、教室前後において、先天性聴覚障害者は 85%以上、難聴者は 79%以上が「はい」と答えた。先天性聴覚障害者、難聴者における教室前後の比較、および教室前後における先天性聴覚障害者と難聴者の比較では有意差はなかった。

第 2 章　喉頭摘出者の術後症状と医療者のコミュニケーションについて

事前調査では喉頭摘出後の症状として、嚥下困難、痰が絡む 15 名(75%)、便秘、息苦しい、食事量の減少 14 名(70%)、不眠、気管孔周囲の皮膚乾燥 13 名(65%)、腹部膨満 9 名(45%)、下痢 7 名(35%)、風邪をひきやすい 3 名(15%)であった。事前調査で明らかとなった、術後症状として発現が多く薬によって対処可能な便秘、不眠、痰が絡

む、気管孔周囲の皮膚乾燥の4症状についての理解度と安心感の総合評価の中央値は、教室前において4症状いずれも5から6点であったが、教室後9から10点に有意に上昇した（Table 1）。理解度と安心感の総合評価に相関があるか検討した結果、教室前の理解度と安心感の総合評価に正の相関関係が4症状すべてで認められた。

教室前の理解度と安心感の総合評価に関連する要因について、術後年数では術後5年未満の総合評価のうち、気管孔周囲の皮膚乾燥の安心感の中央値5(3-8) は術後年数5年以上の7(4-10) に比べ有意に低かった。他の項目では有意差はなかったが、便秘の理解度と安心感、痰の理解度、皮膚乾燥の理解度の中央値は低い傾向にあった。症状の発現数および薬の服用の有無のグループ間で4症状の理解度と安心感の総合評価の中央値に差は見られなかった。

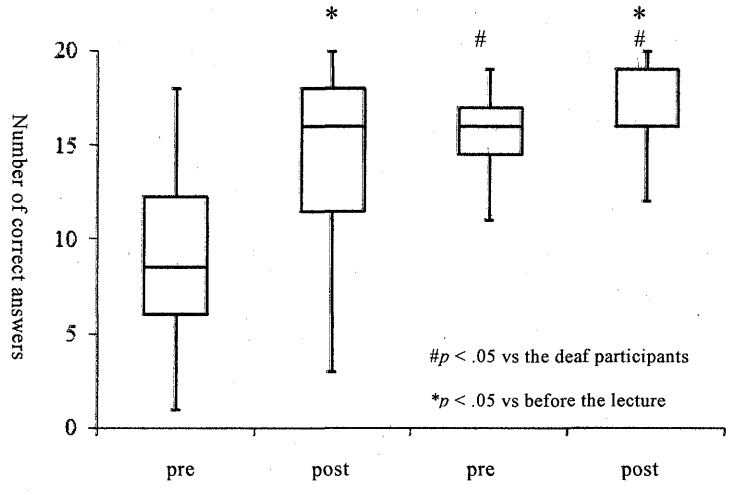

Fig.1

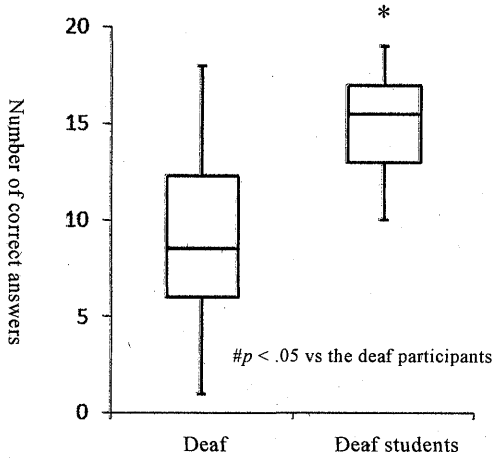

Fig.2

Fig.1 Number of correct answers provided on the questionnaire about knowledge of medication use by the Deaf and hard of hearing (HH) participants pre and post the medication education lecture.

Fig.2 Number of correct answers provided on the questionnaire about knowledge of medication use by the elderly Deaf participants before the medication education lecture and high school Deaf students.

Table 1. Total scores of understanding and reliefs pre and post-medication education lecture

Symptom	Item	Pre (n=24) Total scores Median (min–max)	Pre Average	Pre S.D.	Post (n=24) Total scores Median (min–max)	Post Average	Post S.D.	*p* value
Constipation	Understandings	6 (3-11)	6.21	2.13	9 (6-12)	9.33	1.24	< 0.001
	Relief	6 (3-10)	6.33	1.63	10 (9-12)	9.96	1.08	< 0.001
Insomnia	Understandings	6 (3-12)	5.83	2.24	9 (3-12)	9.17	1.60	< 0.001
	Relief	6 (3-11)	5.67	1.83	9 (6-12)	9.25	1.26	< 0.001
Phlegm	Understandings	5.5 (3-12)	5.54	1.91	9 (6-12)	9.04	1.40	< 0.001
	Relief	6 (3-10)	5.96	1.83	9 (6-12)	9.42	1.47	< 0.001
Skin dryness	Understandings	5 (3-12)	5.50	2.28	9 (3-12)	8.50	1.77	< 0.001
	Relief	6 (3-10)	5.92	1.86	9.5 (6-12)	9.50	1.47	< 0.001

【考察】

患者のヘルスリテラシーの向上のために、薬剤師は健康や疾病、薬の使い方などに関する情報を分かりやすく提供することが必要である。そのためには、患者のヘルスリテラシーを評価することによって、そのリテラシーに合わせた効率的な情報提供を行うことが大切である。本研究では、音声コミュニケーション障害を有する先天性聴覚障害者と喉頭摘出者の薬の使い方や症状についての知識、安心感を把握し、薬剤師が薬の使い方についてリテラシーに応じた講義を行い、知識と安心感の向上に貢献した。

第１章では、先天性聴覚障害者の高齢者の薬の使い方に関する知識を把握し、薬剤師が先天性聴覚障害者の読み書きのリテラシーに応じた薬の使い方に関する講義を行った。先天性聴覚障害者の高齢者の知識は難聴者、健聴者、先天性聴覚障害者の高校生より低いことが示唆され、薬剤師による講義が、薬の使い方に関する知識の記憶の向上に役立つことが明らかとなった。一方、先天性聴覚障害者は自身の理解度を過大評価していることも明らかになった。薬剤師が先天性聴覚障害者とのコミュニケーション障害について認識し、先天性聴覚障害者の薬の使い方の知識を把握することは、効率的な情報提供を行うことに寄与できることを示した。

第２章では、薬剤師が喉頭摘出後の症状の要因、生活上の注意、症状緩和に使用される薬にいて説明、患者相互で術後症状についての情報を交換する教室を行い、喉頭摘出者の術後症状についての理解度、安心感が向上した。患者会における薬剤師による喉頭摘出者の術後の症状、服薬状況の確認、医療者とのコミュニケーションの現状の把握が、効果的な薬物療法に寄与することを示した。

以上、本研究により、薬剤師が音声コミュニケーション障害を有する先天性聴覚障害者と喉頭摘出者に対し、薬の使い方や症状についての知識と安心感を把握し、リテラシーに応じた講義を行うことで、その知識と安心感が向上できることが明らかとなった。今後も薬剤師が先天性聴覚障害者と喉頭摘出者の薬の使い方や症状についての知識、安心感の向上に貢献することで、ヘルスリテラシーの向上の実践が可能になると期待される。

【発表論文】

本論文の内容は下記の発表論文、投稿中の論文による。

第１章

Naomi Hyoguchi, Daisuke Kobayashi, Toshio Kubota and Takao Shimazoe
Effects of Medication Education to Deaf Patients by Pharmacists
Journal of Deaf Studies and Deaf Education (in press)

第２章

俵口奈穂美、窪田 敏夫、小林 大介、島添 隆雄
喉頭摘出者の術後症状に関する理解度および安心感とお薬教室の効果
薬学雑誌　（投稿中）